

# 小学校英語指導力養成講座に求められる要素

## Crucial Factors to Consider when Conducting a Special Seminar for Teaching English at Elementary Schools

金子 義隆

KANEKO Yoshitaka

### Abstract

The purpose of this study is to investigate critical factors that should be taken into consideration when conducting a special seminar that helps teachers learn how to teach English at elementary schools. Meikai University, in collaboration with J-SHINE and other affiliating offices of education, held a special seminar for elementary school teachers and others in 2020. Questionnaires were given to the attendees immediately after the seminar to evaluate it. The results were calculated and analyzed through statistical methods such as regression analysis in order to investigate what factors affected the degree of general satisfaction of the participants of the seminar. The results show that there were several influential factors. The most critical factor was the extent to which participants realized that the contents of the seminar met their needs. Therefore, a needs analysis should be conducted before future seminars and needs should be taken into account.

キーワード：小学校英語，指導力養成講座，評価，重回帰分析

## 1. はじめに

2020年度から全国の小学校で「外国語」が教科として5・6年生に対して導入された。これまで5・6年生で行われていた「外国語活動」は3・4年生で実践される形となった。「外国語」は週2時間の年間70単位時間、「外国語活動」は週1時間の年間35単位時間で行われることとなった。この場合の「外国語」は原則として「英語」とすることになった（文部科学省，2017）。小学校における英語教育がより本格化していくこととなった。2017年告示の学習指導要領では，それぞれの目標を以下のように掲げている。

### 〈小学校外国語科〉

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動を通して，コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成する。

### 〈小学校外国語活動〉

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，話すことの言語活動を通して，コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成する。

上記の目標から，「コミュニケーション」がキーワードであることが読み取れる。前回の学習指導要領（（文部科学省，2008））からコミュニケーション

が重視されているが、より強調される形となっている。つまり、コミュニケーション能力の育成が続けて期待されているわけである。そうすると、授業でもコミュニケーション活動を中心とする授業展開が求められることになり、そういう授業を展開できる指導力が小学校教員に求められていることになるわけである。学習指導要領（(文部科学省, 2017)）では、「言語活動」という言葉が使われている。この「言語活動」は、発音練習やパターンプラクティスなどの文型や表現、発音などの練習ではなく、相手を設定あるいは想定して意味のやり取りを行うコミュニケーション活動のことを指すものとなっており、本稿では「言語活動」を「コミュニケーション活動」と表現することとする。

しかし、上述した授業を展開できる教員が十分に存在するとは言い難い（Kaneko & Otoshi, 2012; 田尻, 2006）。小学校に「外国語活動」の導入が決まって以来、小学校教員の英語指導力向上を図るためのさまざまな施策が実施されてきた。例えば、独立行政法人教員研修センターの「総合的な学習の時間（小学校英語活動）」研修講座（平成13年度から16年度実施）や、文部科学省の小学校英語活動地域サポート事業における研修講座（平成17年度から実施）などである。これらの研修で全国の小学校教員が上述した授業展開をするのに十分であるとは言えない。文部科学省（2014）が実施した「小学校外国語活動実施状況調査」の結果によれば、外国語活動に対する意識に関して、教員の88.2%が「おおよそのイメージはつかめている」、91.5%が「児童と一緒に楽しんでいる」と回答している。その一方で、教員の67.3%が「英語が苦手である」、60.8%が「準備などに負担感がある」、34.6%が「自信を持って指導している」と回答している。自信を持って指導できる教員はわずか約35%で、残りの6割以上の教員は十分に自信を持って指導ができていないということになる。

このような現状を踏まえて、文部科学省は、教員

養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業（小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業）に関する公募を公示した。その趣旨は、「小学校中学年で外国語活動、高学年での外国語科が導入される学習指導要領を円滑に実施するため、教師の負担を軽減しつつ、質の高い授業を行える指導体制を構築することが喫緊の課題である。このため、現職の小学校教師等を対象に外国語活動及び外国語科（英語科）の指導に対応する講習等を開発し、実施する。」ことである。そして、今回の公募の事業の内容としては、「小学校普通免許状あるいは中学校普通免許状を有する現職の教員、臨時的任用職員、非常勤講師、教員養成課程の学生、小学校外国語教育に関わる者（特別免許状授与者又は特別免許状の授与が期待される人材（ネイティブ・スピーカーや英語が堪能な人材等）を対象に外国語活動及び外国語科の指導に対応する講習、講座等を開発し、実施する。」ことであった。要するに、学習指導要領で求められている授業を展開できる小学校の教員の英語指導力を養成するための講座を実施することが望まれたわけである。

応募に際しては、本学は小学校英語の導入を視野にさまざまな改革を実施してきたところであるが、まだその取組は始まったばかりであったので、過去20年にわたり小学校英語の指導者を認定してきたJ-SHINE（小学校英語英語指導者認定協議会）を協力機関として迎え入れて実施することとした。

このように、本学は上述した「教員養成機関等との連携による小学校外国語の専門人材育成・確保事業（小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業）」に応募して、文部科学省から事業の委託を受けることとなった（これよりこの事業をMEIKAI-JOEと呼ぶ）。MEIKAI-JOEの目的や内容は上述した通りであるが、実際の講座内容などは本学に任された。そこで、講座内容は、J-SHINEの協力を仰ぎながら本学の講座開発実施チームを中心に検討され、決定された。講座内容の決定に至るまでに、こ

れまでの小学校訪問・訪問研修等や「英語教育コアカリキュラム」を踏まえて、主に以下の課題があることが分かっていた。

- ① 学級担任が単独で行う授業における指導方法と指導の改善
- ② ALT との TT における望ましい学級担任の指導の在り方
- ③ 指導と評価の一体化の具体的方法

上記の課題を解決するために計 5 回の講座内容を計画し、実施した。事業の概要は以下の通りである。

1. 目的：多くの学級担任が抱えている小学校外国語科・外国語活動の指導に対する不安感を払しょくし、授業に積極的に取り組む意欲を向上させるとともに、円滑に指導できる指導力及び英語力を養成する。
2. 受講対象者：東京都足立区、千葉県浦安市及び秋田県横手市（3 自治体ともに明海大学と連携協定を締結）公立小学校の教員とする。
3. 講座内容：

**【第 1 回】学習指導要領**

学習指導要領に記されている外国語科・外国語活動の目標・内容等を理解する講座とする。

**【第 2 回】効果的なチーム・ティーチングの在り方**

チーム・ティーチングにおける学級担任の役割、ALT の役割について理解できる内容とする。具体的には、学級担任役の本学の学生と ALT がチーム・ティーチング（Small Talk や Activity のモデル会話などを含む）を行う。併せて、短時間でできる打合せの方法や Classroom English や絵本の読み語りな

どを練習したりする内容も入れる。

**【第 3 回】Small Talk の実際とデジタル教科書への接続**

本年度から始まった外国語科における教科書及び外国語活動において活用する教材のより効果的な使い方を知ることができる内容とする。なお、後半には講師による Micro Teaching（Small Talk や必然的な Activity などを含む）を実施する。

**【第 4 回】学習指導と評価**

小学校外国語科・外国語活動における指導と評価の在り方について、具体的な Activity や発表に基づきながら理解する内容とする。

**【第 5 回】小学校英語指導の心得 と中学校への接続の期待**

本講座のまとめとして、講師と受講者及び受講者同士が小学校外国語科・外国語活動のよりよい授業の在り方について協議する内容とする。

今回、文部科学省から委託されたこのような講座を本学は実施したわけだが、それだけで十分ではなく、小学校の教員の英語指導力養成講座は今後も全国の至る所でまだまだ必要になることは間違いないだろう。このような講座を今後も実施していく上で、受講する小学校教員が講座のこういった要素を基準として講座の評価を決めるのかを把握しておくことは重要なことである。なぜなら、講座を実施する側としては、受講者を満足させたいと当然考えるわけで、それが講座の目標の一つだからだ。そのためには、受講者が講座のどの側面を重視しているかを理解しておく必要がある。

## 2. 方法

### 2.1 目的

上述したように、MEIKAI-JOEの講座の中で受講者が何に重きを置いて講座の評価をしたのかを明らかにすることで、小学校英語の指導者養成講座に求められる要素を究明することを本研究の目的とする。

### 2.2 参加者

MEIKAI-JOEに参加した受講者（東京都足立区、千葉県浦安市及び秋田県横手市の公立小学校の教員）には、計5回の講座の各講座終了後に講座評価アンケートに回答してもらった。本研究の対象者はそのアンケート回答者である。

講座評価アンケート（資料1）は、全講座で共通したものを使用した。講座評価アンケートは、5件法で最初に属性に関する質問4つ、次に内容に関する質問9つで構成された。講座の満足度を知るために、アンケートの中で「8. 総合的にこの講座に満足できましたか。」という問いを入れた。また、質問8の後に、「9. このような機会がまたあれば、受講したいですか。」という質問をしたが、これは質問8とは独立した、影響を与えない質問だと判断して、本研究から除外した。

加えて、「7. 講座後のタスクは役に立ちましたか。」という問いは、アンケート回答期限までにタスクを実施できない場合があったので、全5回の講座に渡って本研究では質問7も除外して分析した。

質問「8. 総合的にこの講座に満足できましたか。」に影響を与える他の質問の特定とその質問の影響度を特定するために、質問「8. 総合的にこの講座に満足できましたか。」を従属変数とし、他の質問1～7を独立変数としてSPSSを使って重回帰分析をステップワイズ法を用いて行った。「最も妥当性の高いモデルを作る」ためである（石川, 2010, p.118）。計5回の講座それぞれに分析を行った。

## 3. 結果

まず第1回講座を分析した。表1では、一番妥当性の高いモデルを探すためにモデルが3つ作られた。その中で一番妥当性の高いモデルはモデル3であり、全体の約60%を説明できることが分かった。

表2からは、各モデルにおける質問8に影響を与

表1 第1回講座モデルの要約

モデル	R	R <sup>2</sup> 乗	調整済み R <sup>2</sup> 乗	推定値の標準誤差
1	.664 <sup>a</sup>	0.441	0.435	0.538
2	.745 <sup>b</sup>	0.556	0.545	0.483
3	.778 <sup>c</sup>	0.605	0.591	0.458

表2 第1回講座モデルの係数<sup>a</sup>

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	0.436	0.159		2.740	0.007		
	質問 1	0.792	0.095	0.664	8.338	0.000	1.000	1.000
2	(定数)	0.020	0.168		0.120	0.905		
	質問 1	0.598	0.095	0.502	6.326	0.000	0.812	1.232
	質問 6	0.384	0.081	0.375	4.728	0.000	0.812	1.232
3	(定数)	-0.128	0.166		-0.772	0.442		
	質問 1	0.439	0.102	0.368	4.296	0.000	0.626	1.596
	質問 6	0.291	0.082	0.285	3.548	0.001	0.715	1.399
	質問 3	0.341	0.104	0.292	3.264	0.002	0.573	1.746

a. 従属変数 8. 総合的にこの講座に満足できましたか。

える他の質問のそれぞれの影響力を読み取ることができる。モデル3においては、このモデルでは、質問「1. 講座の内容は学校現場のニーズに合っていましたか。」と質問「6. 講座中のタスクは役に立ちましたか。」、質問「3. 講座で提示された資料は今後活用できますか。」の回答が質問8の回答に影響を与えていることが分かった。その中で質問1が全体の影響力の約37%を説明しており、一番大きい。質問6は約29%、質問3も約29%となっている。この結果から、質問8の回答は、上記の3つの質問の回答に約60%影響を受けていることが明らかになった。

続いて、第2回講座を同様に分析した。表3によれば、3つのモデルが作成されたが、最も妥当なものがモデル3であり、全体の約79%を説明できることが分かった。

表4から、上述のモデル3は質問「6. 講座中のタスクは役に立ちましたか。」と質問「3. 講座で提示された資料は今後活用できますか。」、そして質問「5. 講座前のタスクは役に立ちましたか。」に影響

を受けていることが分かった。その中でも質問6の影響力が約45%と最も大きいことが分かった。

第3回講座も同様に分析をした。表5によれば、3つのモデルが作られたが、最も妥当なものはモデル3であり、全体の約72%を説明できることが分かった。

表6によれば、上述の最も妥当なモデル3においては、質問「1. 講座の内容は、学校現場のニーズに合っていましたか。」と質問「6. 講座中のタスクは役に立ちましたか。」、そして質問「3. 講座で提示された資料は今後活用できますか。」が質問8に影響を与えていることが分かった。その中で、質問1が最大であった(42%)。

続いて第4回講座の分析をした。表7によれば、モデルは3つ作られたが、最も妥当なモデルはモデル3であり、全体の約87%を説明できることが分かった。

表8によれば、モデル3では、質問「1. 講座の内容は、学校現場のニーズに合っていましたか。」と質問「4. 講師の説明は分かりやすかったですか。」、そして質問「6. 講座中のタスクは役に立ちましたか。」が影響を与えていることが分かった。第4回講座においても、最も影響力の強かったものは質問1であった(約43%)。

最後に、第5回講座の分析を行った。表9によれば、モデルは3つ作られたが、モデル3が最も妥当

表3 第2回講座モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.840 <sup>a</sup>	0.705	0.702	0.382
2	.885 <sup>b</sup>	0.784	0.779	0.329
3	.895 <sup>c</sup>	0.800	0.794	0.317

表4 第2回講座モデルの係数<sup>a</sup>

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	0.323	0.098		3.299	0.001		
	質問6	0.784	0.053	0.840	14.822	0.000	1.000	1.000
2	(定数)	0.102	0.092		1.104	0.272		
	質問6	0.493	0.068	0.528	7.238	0.000	0.447	2.235
	質問3	0.424	0.074	0.420	5.760	0.000	0.447	2.235
3	(定数)	0.073	0.090		0.817	0.416		
	質問6	0.417	0.071	0.446	5.852	0.000	0.381	2.626
	質問3	0.330	0.079	0.327	4.181	0.000	0.363	2.752
	質問5	0.183	0.066	0.208	2.752	0.007	0.388	2.577

a. 従属変数 8. 総合的にこの講座に満足できましたか。

表5 第3回講座モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の 標準誤差
1	.792 <sup>a</sup>	0.628	0.623	0.416
2	.845 <sup>b</sup>	0.714	0.707	0.367
3	.856 <sup>c</sup>	0.732	0.722	0.358

表6 第3回講座モデルの係数<sup>a</sup>

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	0.421	0.122		3.449	0.001		
	質問 1	0.833	0.071	0.792	11.694	0.000	1.000	1.000
2	(定数)	0.072	0.129		0.557	0.579		
	質問 1	0.572	0.082	0.544	6.951	0.000	0.583	1.716
	質問 6	0.450	0.092	0.384	4.907	0.000	0.583	1.716
3	(定数)	0.020	0.128		0.158	0.875		
	質問 1	0.442	0.098	0.420	4.503	0.000	0.389	2.570
	質問 6	0.396	0.092	0.338	4.283	0.000	0.545	1.835
	質問 3	0.214	0.093	0.207	2.300	0.024	0.419	2.387

a. 従属変数 8. 総合的にこの講座に満足できましたか。

表7 第4回講座モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の 標準誤差
1	.908 <sup>a</sup>	0.825	0.823	0.410
2	.928 <sup>b</sup>	0.862	0.859	0.366
3	.933 <sup>c</sup>	0.871	0.867	0.355

表8 第4回講座モデルの係数<sup>a</sup>

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	0.196	0.083		2.374	0.020		
	質問 1	0.936	0.044	0.908	21.038	0.000	1.000	1.000
2	(定数)	0.158	0.074		2.129	0.036		
	質問 1	0.565	0.084	0.549	6.719	0.000	0.223	4.489
	質問 4	0.413	0.083	0.408	4.997	0.000	0.223	4.489
3	(定数)	0.104	0.075		1.380	0.171		
	質問 1	0.446	0.094	0.432	4.748	0.000	0.169	5.926
	質問 4	0.350	0.084	0.346	4.175	0.000	0.204	4.901
	質問 6	0.194	0.075	0.199	2.592	0.011	0.238	4.208

a. 従属変数 8. 総合的にこの講座に満足できましたか。

なモデルで、全体の約94%を説明できることが分かった。

表10からモデル3では、質問「1. 講座の内容は、学校現場のニーズに合っていましたか。」と質問「3. 講座で提示された資料は今後活用できますか。」、そして質問「6. 講座中のタスクは役に立ちましたか。」の3つの質問が影響を与えていることが分かった。そして、最大の影響力を持っているのが、質問1であることが分かった（約43%）。

表9 第5回講座モデルの要約

モデル	R	R2 乗	調整済み R2 乗	推定値の標準誤差
1	.955 <sup>a</sup>	0.911	0.910	0.351
2	.964 <sup>b</sup>	0.930	0.929	0.312
3	.969 <sup>c</sup>	0.938	0.936	0.296

#### 4. 考 察

上記の統計解析から明らかになったことを以下にまとめる。まず、各講座ごとに質問「8. 総合的にこの講座に満足できましたか。」に影響を与えた質問を以下の表として作成した（表11）。ここから見えてくることは、質問「1. 講座の内容は学校現場のニーズに合っていましたか。」の影響力である。第2回講座を除いて、他の4回の講座において最大の影響力があった。受講者が講座を評価する際に、講座内容が彼ら自身のニーズに合ったものなのかどうかは非常に大きな要素であることが見えてくる。そもそも必要性を感じることから学びを始める動機になるわけであるから、その必要性を満たしてくれるかどうかは、決定的な要素と言えるだろう。

表10 第5回講座モデルの係数<sup>a</sup>

モデル		非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率	共線性の統計量	
		B	標準誤差	ベータ			許容度	VIF
1	(定数)	0.174	0.075		2.307	0.023		
	質問1	0.930	0.030	0.955	30.708	0.000	1.000	1.000
2	(定数)	0.106	0.068		1.541	0.127		
	質問1	0.573	0.077	0.588	7.481	0.000	0.124	8.051
	質問3	0.386	0.078	0.392	4.982	0.000	0.124	8.051
3	(定数)	0.051	0.067		0.757	0.451		
	質問1	0.417	0.086	0.428	4.865	0.000	0.089	11.252
	質問3	0.284	0.079	0.288	3.592	0.001	0.107	9.380
	質問6	0.277	0.081	0.275	3.421	0.001	0.106	9.390

a. 従属変数 8. 総合的にこの講座に満足できましたか。

表11 講座ごとの影響力

	影響力1位	影響力2位	影響力3位
第1回講座	質問1 (37%)	質問3 (29%)	質問6 (29%)
第2回講座	質問6 (45%)	質問3 (33%)	質問5 (21%)
第3回講座	質問1 (42%)	質問6 (34%)	質問3 (21%)
第4回講座	質問1 (43%)	質問4 (37%)	質問6 (20%)
第5回講座	質問1 (43%)	質問3 (29%)	質問6 (28%)



今回の MEIKAI-JOE の全講座は、受講者のニーズに合う内容で構成することが講座開発・実施チームの意図であった。この結果は、まさに講座開発・実施チームの狙い通りであったと言える。

次に、質問「6. 講座中のタスクは役に立ちましたか。」は全ての講座で影響力を持っていた。特に第2回講座では最大であった。第2回講座では、講座内のタスクが一番多かった講座である。数多くあったタスクがこの回の満足度に大きく影響したようだ。つまり、受講者はそのタスクを高く評価したと言えるだろう。また、第3回講座でも講座内で何回かタスクを行った。この影響はやはり第3回講座の評価につながったようだ。

質問「3. 講座で提示された資料は今後活用できますか。」も影響力が強いことが分かった。第4回講座以外は、全ての講座で強い影響力を与えている。講座内の資料とは、講座内容と直結しているものである。そのため、この要素が大きい影響力を持つことは上述したように講座内容が受講者のニーズにあってることが重要という議論からも容易に説明がつく。受講者側の視点から考えると、講座の資料は講座後も手元に残るものであるため、講座後も活用できるのである。この要素は受講者にとっても重要なものだということが推察される。

上記の3つ以外に、質問「4. 講師の説明は分かりやすかったですか。」が第4回講座に、質問「5. 講座前のタスクは役に立ちましたか。」が第2回講座に影響を与えていた。質問4に関する講師の説明の分かりやすさも大事な要素の一つと考えてよいだろう。ただ、講師の説明に対しては他の講座においても肯定的回答がかなり多かった。第4回講座だけがとても高かったわけでない（この詳細については、紙面の都合上ここでは詳しくは触れない。）では、どうしてこの回だけ影響力が強かったのか。この回は講座内で受講者がタスクに取り組む時間より、講師から説明を受ける時間が多かった。そのため、講師の説明のインパクトはより大きかったと考

えられる。

そして、第2講座で影響を与えていた質問「5. 講座前のタスクは役に立ちましたか。」であるが、この回は他の回と比べて事前タスクが多く与えられていた。受講者はこの事前タスクに満足できたのではないか。だから、この回においては、事前タスクという要素が満足度に大きく影響を与えていたと推察できる。

## 5. 結論

本研究の目的は、MEIKAI-JOE の講座の中で受講者が何に重きを置いて講座の評価をしたのかを明らかにすることで、小学校英語の指導者養成講座に求められる要素を究明することであった。そして、本研究の結論として、以下のことが言える。

- ① 受講者のニーズをできる限り正確に把握して、そのニーズに合う内容の講座を開発することが最も大事である。受講者のニーズに合わない講座内容では、受講者の満足にはつながらない。受講者のニーズを満たすことを中心にすべきである。そのためには、事前に受講者のニーズを把握し分析することが必要不可欠である。
- ② 講座内容に大きく関わってくる講座内タスクは非常に重要である。MEIKAI-JOE の講座ではワークショップを取り入れた講座を展開した。しかし、各回で受講者がタスクに取り組む時間や量、内容、質にはばらつきがあった。それらが満足度に影響を与えていたことは明らかである。タスクは、受講者が自分で実際に課題に取り組むことで身に付きやすくなる効果がある。やはり受講者のニーズに合ったタスクは講座において重要な要素だと言えるだろう。講座において、説明とタスクの適切な配分なども考慮すべきである。そ



して、講座前や後のタスクも大きな役割があるので、受講者のニーズを考慮したものである必要がある。

- ③ 講座で示される資料は受講者にとって重要である。なぜなら、講座終了後にも活用できるからである。講座内で全てを学ぶことは難しい。だから、講座終了後でも振り返えられるものが受講者の手元に残ることが望ましい。講座内だけでなく、講座後のことも考えて講座開発することが求められる。
- ④ 講師の説明も当然と言っていいと思うが重要である。分かりやすいことが求められるであろう。そのために、説明は簡潔で、且つ核心を突く必要がある。適宜具体例を挙げることは必ず必要になる。声の大きさ、明瞭さも必要な要素であろう。

本研究から上述の結論を導き出すことができた。しかし、この結論が全ての小学校英語の指導者養成講座に当てはまるとは言い切れない。なぜなら、MEIKAI-JOEの講座の対象者は、本学と連携協定を結んでいる3区市からのとても限られた人数であった。これは日本全体の小学校教員を十分に反映しているとは言い難い。小学校英語に関する講座の

受講歴や指導経験年数など、各所属自治体によって大きく変わってくると考えられる。そのため、その点を考慮したうえで上述の結論を活用する必要がある。今後、本研究の結果を活かした養成講座が行われ、小学校英語に関わる教員がより自信を持って授業に臨むことができるようになることを期待する。

#### 引用文献

- 石川有香. (2010). 「第5章 回帰分析：データから説明モデルを作る」『言語研究のための統計入門』東京：くろしお出版
- Kaneko, Y., & Otoshi, J. (2012). Exploring Causal Relationships between Attitudes toward English Education in Elementary Schools and English Learning Motivation: Based on a Survey of Current Teachers and Prospective Teachers. *Studies in Comparative Culture*, 101, 63-77
- 文部科学省. (2014). 『小学校外国語活動実施状況調査』  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/gaikokugo/1362148.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1362148.htm)
- 文部科学省. ((2008)). 『中学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』東京：開隆堂
- 文部科学省. (2017). 『中学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』東京：開隆堂
- 田尻悟郎. (2006). 『日本の英語教育に必要なこと 小学校英語と英語教育政策』慶應義塾大学出版会